

サンワ・リノテックがお届けするお得な記事満載の情報紙。 きっとお役に立ちます。

ユーザー様訪問

本誌の前号で、(有)TEM'Sの和田社長のお話の中でできましたHi-jet ARC工法。もう少し詳しく知りたいというお問い合わせがありましたので、今号は、その生みの親でもある(株)藤林商会の藤林社長からその工法が認可されるまでのお話をお伺いしてみました。

なお、今回の東日本大震災で被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

司会 前回Hi-jet ARC工法について、紙面の都合で十分な説明ができませんでした。その後も数多くの問い合わせがありましたので、藤林社長から直接説明いただきたいと今回企画いたしました。ARC工法が誕生したいきさつなどをお聞かせ願います。



株式会社藤林商会
代表取締役
藤林 秀樹様

藤林 当社はもともと防水工事を始めとする建設工事の機械施工を看板にした建設会社です。また、アスベスト処理の実績も23年間あり、その中で平成21年に規制強化された「船舶」については、青函連絡船の5~10cm厚のクロシドライト吹き付け材や、アモサイト配管保温材の除去実績があります。

煙突内のアスベスト除去に踏み出すきっかけになったのは、アスベスト全般の処理をしているなかで、煙突の廃材の中にアスベストが含まれている疑いがでてきたんです。そこで調べてみると、脚部にある点検口(灰出し口)が剥落したアスベストで詰まっているのに、そのまま放置されている現実にビックリしたことが始まりです。

当社の技術に、コンクリートを超高压の水で削り取るというノウハウを持っていたことも一因かもしれませんが、このやり方を煙突アスベスト除去に応用すればと取り組み始めた結果、除去についてはハイレベルな処理技術を完成させることができました。しかし、除去に使用した汚染水をろ過処理しても、ろ過水の中に多数のアスベスト繊維が確認されたのです。

国内にアスベストの放流基準はないものの、そのまま下水道等へ放流することは会社の方針やモラル上できませんでした。そこから改良に向けての試行錯誤の取り組みが始まった訳です。

粉じん飛散を少なくするには多量の水、また排水放流を考慮すると少水量、作業床の防水対策、除去時の上昇気流(ドラフト)対策、効率のいい除去の仕方はどんな方法があるか等、問題は山積みでした。

出てきた答えは、水は使うけど適度の最小限の水量で濡らしながら除去と洗浄を一工程で実施して水量を抑え、最終的に発生した余剰汚染水は吸水性樹脂等を使って吸水し、それらを全部まとめてアスベストの廃棄物として処理

処分することで、考案した装置ができあがり工法が完成しました。

ARC工法とは、Aはアスベスト、Rはリムーバル(除去・切削)、Cはチムニー(煙突)の頭文字から名付けた名前です。

いま全国にどれだけの煙突があって、毎日どれだけの本数の煙突が稼働しているか。しかも煙と一緒に沢山のアスベスト繊維が周辺にまき散らされているのにまったく知らされていない現実。改めて煙突のデータを調査してみると、このまま放っておけば大変なことになるんじゃないかと思ったのが最初です。

とって自社だけで全国の煙突アスベストを除去するのは並大抵ではありません。そこで、各地にある施工工事企業さんを会員さんとして迎え、煙突から排出されるアスベストを早く安全確実に除去する工法を共有するほうが大きなパワーになると考えています。きちっとしたカタチを伝授して安全な方法で除去する方向に持っていかねばと思います。

最近の調査では、ボイラー稼働時に煙突頂部から数千本のアスベスト繊維が飛散されている事実が数多く確認され、気になるところであります。新聞紙面等で報じられている吹き付けアスベスト等の除去処理現場で、設置使用されている負圧除じん装置吹き出し口付近の採取空気から、アスベスト繊維が10本以上検出された場合は、作業は即時ストップされているのに、煙突の場合は確認もされずに排煙とともに大気へ放出されています。アスベストの断熱材が確認された煙突は、使用を継続するかぎり劣化することは避けられず、極端なところ煙突の排煙口に、必ずフィルターを介さなければ煙突を使用できないぐらいの厳しい処置があってもいいのではないかと私は考えています。

ただ、煙突を改修や建て替えをするとすると、法律とかコストの問題などクリアしなければならないことが多いことも事実ですが、いつまでもこの問題を放置しておいて、6年前の吹き付けアスベスト問題(クボタショック)のように健康被害が拡大しなければと心配しています。

決してARC工法を過大にPRするために話を大げさにしているのではなく、現実の問題としてもっと多くの人に関心を持っていただきたくて、役所や煙突の所有者等に掛け合ったりして、啓蒙活動を行っているところです。今年も5月24日からの環境展(東京ビッグサイト)でPRすると共に、幅広い方々に危険認知をしていただきたいと思います。

過去の解体現場でみてきた経験からいえることは、アスベスト断熱材が無傷でそのまま煙突内部で使用されているケースはまずありえません。そのような意見 (裏面に続く)

